

【論文】

熊本ドイツ兵俘虜収容所における俘虜郵便について

萩 野 蔵 平

Über die Kriegsgefangenenpost aus dem deutschen
Kriegsgefangenenlager Kumamoto

Kurahei OGINO

要旨

Im Japanisch-Deutschen Krieg 1914 diente Kumamoto als Lager für deutsche Kriegsgefangene. Dieses Lager, das am 16. November 1914 eröffnet und am 9. Juni 1915 aufgelöst wurde, beherbergte 651 Mann. Da Kumamoto aber ein provisorisches Lager war, wurden als Unterkunft u.a. das Konferenzgebäude der Produktenbörse und neun Tempelanlagen in der Stadt benutzt. Von den Materialien, die der Verfasser von einem in Kumamoto ansässigen Philatelisten leihen durfte, werden im Folgenden insbesondere sechs Kriegsgefangenen-Karten aus dem bzw. an das Lager Kumamoto vorgestellt. Da dieses Forschungsgebiet ein Neuland ist, soll der hier vorliegende Beitrag erste Anregungen zu weiterer Untersuchung geben.

キーワード：ドイツ兵俘虜郵便、熊本ドイツ兵俘虜収容所、日独戦争、青島（チンタオ）攻防戦

1. はじめに

1914年7月、欧州において第1次世界大戦が勃発すると、日本軍は日英同盟の合意に基づき、同年8月ドイツに対して宣戦布告をする。日本軍は、中国山東半島北部龍口に上陸したのち、中国におけるドイツの膠州租借地（青島（チンタオ）とその周辺）を攻撃した。しかし、両国の兵力差は、ドイツ（・オーストリア・ハンガリー）軍5,000人に対して日本軍7万人と歴然としており、開戦から3ヶ月後の11月に青島要塞が陥落するに及び、ドイツ軍の降伏で戦争は終結する。「日独戦争」とも「青島（チンタオ）攻防戦」とも称されるこの戦闘における戦死者数は、資料によって異なるが、日本側1,014名、ドイツ側189名だったという。¹そして、約4,700人に及ぶドイツ兵（およびオーストリア・ハンガリー兵）が俘虜となり、戦争終結を待たずに早くも10月には日本本土への移送が開始された。

当初設置された収容所は、全国12ヶ所（東京、静岡、大分、名古屋、姫路、松山、丸亀、徳島、大阪、福岡、久留米、熊本、図1参照）で、今回取り上げる熊本俘虜収容所もそのうちの1つである。ところで、ドイツ兵俘虜収容所の存在が一般にも注目されるきっかけとなったのは、まずは、2005年

妙立寺、妙永寺、実成寺、2) 細工町の西光寺、光善寺、阿弥陀寺の計9ヶ所に分散収容された。熊本市の西部ならびに西南部に位置するこれらの寺院が選ばれた理由には、交通・警戒の便がよいこと、郵便電信局に近いことの他に、西光寺、光善寺のような本願寺派の寺院は、他の宗派より建物が大きく収容能力が高いという事情もあったようだ。これらの寺院には、新たに便所・浴室・洗面所・物干し・渡り廊下・竹矢来が急造され、また、炊事場を南千反畑・細工町に各1ヶ所、横手村に2ヶ所新設するなど俘虜の便宜が図られた。

最後に、熊本収容所は全国の収容所のなかで開設期間が最も短かく7ヶ月足らずで閉鎖された。その理由は、秋の天皇即位の大典に合わせて、記念国産共進会が開催されることとなり、熊本市会が物産館の早急な明け渡しを要求したこと、さらに、寺院も合わせて苦情を申し出たためと言われる。そのため、1915年6月9日に俘虜全員は久留米に移送され、これをもって本収容所は閉鎖されることとなった。

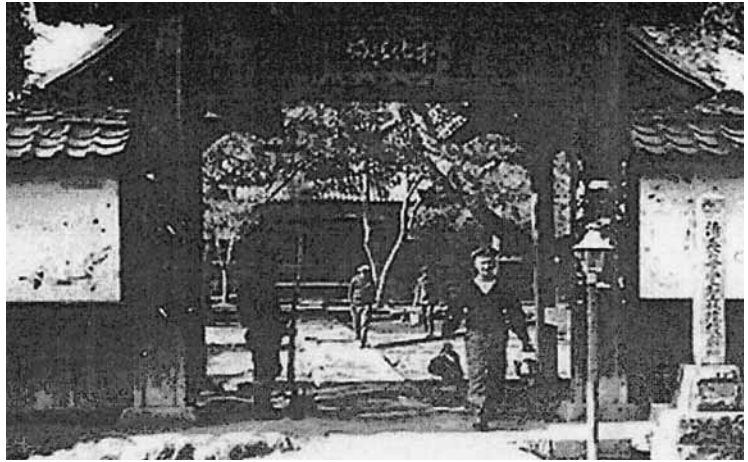


図2 妙永寺山門を出入りするドイツ兵俘虜
(出典：Seitz (1998)、p.165)

3. 資料について

今回提供を受けた日独戦争に由来するドイツ兵俘虜の郵便資料は、すでに述べたように、全部で25点である。そのうち5点は(手紙の入っていない)封筒のみであったため調査から除外し(次ページ図3の左側番号に横線が引いてあるNo.4、8、17、18、19)、残りの20点を最終的な分析の対象とした。なお、それらはすべて絵はがきである。それらの絵はがきの表面(と時に裏面)には細かな字で4行~10行程度の手紙文が記されている。また、その裏面には、熊本であれば「熊本百景」(熊本城、加藤神社、水前寺公園、江津湖など)や、ドイツからの郵便では、例えばレーゲンスブルク、ウルムなどの町の写真・風景画が印刷されている。その内訳は、熊本発の郵便が合計14通(うち宛先がドイツ：12通(No.1、2、5、6、7、10~16)、中国：1通(No.3)、久留米：1通(No.9))、反対に宛先が熊本のものが6通(うち神戸発1通(No.20)、ドイツ発5通(No.21~25))である。さらに図の右欄には差出人(No.1~19)および受取人(No.20~25)のドイツ兵俘虜の氏名と、判明する限りにおいて、軍における所属、階級を記しておいた。⁴

今回の資料全体を通して確認できることは、まず、はがきはすべて海軍関係者のものであった。これは、熊本に収容された部隊が主として海軍所属の部隊であったことによる。また、俘虜に占めるその人数の割合からしても、資料のほとんどが下士卒からの郵便物であった。さらに、郵便の内容から判断すると、肉親宛てあるいは肉親からのものと思われるものが多数を占めている。そのうち、同一

の俘虜からのはがきが3通、同一の俘虜へのはがきが4通確認できた。前者は、Leibig（ライビヒ）（階級不明）からのもの（No5, 9, 13）、後者は、ドイツからMosandl（モーザンドル）兵曹へのもの（No21, 23, 24, 25）である。

本論文では、紙面の都合上、すべての郵便を詳細に扱うことはできないが、特にその中から俘虜の心情や収容所の生活の一端が偲ばれる6通（図3で網かけがされているもの）を紹介したい。すなわち、熊本→ドイツが3通（No2、11、13）、神戸→熊本が1通（No20）、ドイツ→熊本が2通（No23、25）である。

	発信地＞宛先	差出人(1-19)および受取人(20-25)のドイツ兵俘虜の氏名、所属、階級
1	熊本＞ドイツ（Wilhelmshaven）	（不明）
2	熊本＞ドイツ（Schweinfurt）	Erich Fischer、第3海兵大隊第4中隊・予備伍長
3	熊本＞中国（上海）	Wilhelm Carl、第3海兵大隊・2等歩兵
4	熊本＞中国（広東）[封筒]	Ferdinand Konitzky、第3海兵大隊第6中隊・2等歩兵
5	熊本＞ドイツ（Frankfurt /M.）	Fritz Leibig、第3海兵大隊第4中隊
6	熊本＞ドイツ（Offenbach）	Ehrenfried Weber、海軍膠州砲兵第5中隊・2等砲兵
7	熊本＞ドイツ（Distelen/Westfalen）	Bernhard Niedbala、第3海兵大隊第4中隊
8	熊本＞ドイツ（Köln）[封筒]	Anton Müller、第3海兵大隊・士官
9	熊本＞久留米	Fritz Leibig、第3海兵大隊第4中隊
10	熊本＞ドイツ（Weißenburg）	Fritz Goppelt、海軍野戦砲兵隊・予備上等兵
11	熊本＞ドイツ（Zeitz/Sachsen）	Richard Seifert、第3海兵大隊第4中隊・伍長
12	熊本＞ドイツ（Würzburg）	Ernst Blass、海軍砲兵中隊・2等測量兵
13	熊本＞ドイツ（Frankfurt/M.）	Fritz Leibig、第3海兵大隊第4中隊
14	熊本＞ドイツ（Breslau）	Gustav Leopold、第3海兵大隊第4中隊
15	熊本＞ドイツ（Hannover）	Reinhold Engel、第3海兵大隊第4中隊・2等歩兵
16	熊本＞ドイツ（Wünsiedel/Bayern）	Richard Braedlein、第3海兵大隊・予備上等歩兵
17	熊本＞中国（上海）[封筒]	Carl Ettingshaus、海軍膠州砲兵・予備1等砲兵
18	熊本＞ドイツ（Hamburg）[封筒]	Andreas Wulff、第3海兵大隊第4中隊・後備2等歩兵
19	熊本＞オーストリア（Wien）[封筒]	Fritz Frohnwieser, Kaiserin Elisabethに乘船？
20	神戸＞熊本	Wilhelms Klees、第3海兵大隊第6中隊・補充予備兵
21	ドイツ（Regensburg）＞熊本	Josef Mosandl、海軍3等機関兵曹
22	ドイツ（Plauen）＞熊本	Edmund Fischer、第3海兵大隊第4中隊・2等歩兵
23	ドイツ（Ulm）＞熊本	Josef Mosandl、海軍3等機関兵曹
24	ドイツ（Regensburg）＞熊本	Josef Mosandl、海軍3等機関兵曹
25	ドイツ（Regensburg）＞熊本	Josef Mosandl、海軍3等機関兵曹

図3 俘虜郵便の種類と俘虜（差出人・受取人）の氏名・階級

4. 資料の紹介

4. 1. 熊本→ドイツ：No.2の資料

まず最初の資料は、1914年11月26日付けの郵便はがきで、Erich Fischer（エーリヒ・フィッシャー）がドイツ宛に出したものである。これには壹銭五厘の「内国用はがき」が使用されていて、「熊本西通町濱田印刷」の文字が見える。Erich Fischerについては、チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会のサイト内にある「俘虜名簿」に次のように記載されている：

604) Fischer (フィッシャー)、Erich (?-?):「第3海兵大隊第4中隊・予備伍長。熊本俘虜収容所では長国寺に収容された。[・・・]『中国と日本』と題した2巻本の日記を遺した【ウィーンのパンツァー教授(Prof.P.Pantzer)所蔵】。日記には、1915年3月10日熊本収容所において、最初のチフス患者3名が出て、やがて収容所内で広がったことが記されている。[・・・] 1954年11月6日、青島戦闘40年を記念してハンブルクで開催された「チンタオ戦友会」に出席した。バイエルンのシュヴァインフルト (Schweinfurt) 出身。(俘虜番号3288：熊本→久留米)」

表面



裏面

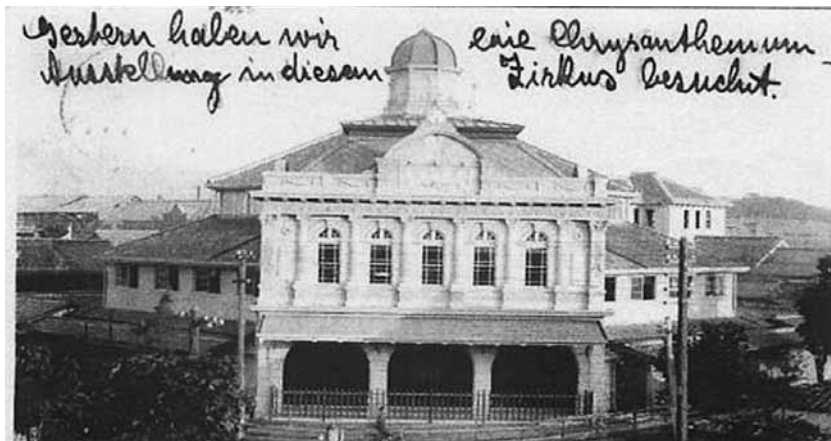


図4 俘虜郵便：熊本→ドイツ (No.2)

それでははがきの内容を順に見ていこう。まず「表面」の右側が宛先欄、左側が文面欄になっている。宛先欄には、この郵便が俘虜郵便であることを示す Sce (=Service) DES PRISONNIERS DE GUERREの朱印が押され、さらにFeldpostcarteと手書されている。宛先は、Familie Kommerzienrat Karl Fischer (商業顧問官カール・フィッシャー一家)、住所は、Schweinfurt a. Main Bayern Deutschland (シュヴァインフルト アム マイン、バイエルン、ドイツ) である。町名番地がないことから相手は町のかなりの名士であり、また、Erich FischerとKarl Fischerは親族であろうか。さらに表面にはいくつもの朱印が押されているのがわかる。まず、「独逸行」の印、それから楕円形の「松木」と縦型の「検閲済」の印である。後者の2つのスタンプは、このはがきが熊本俘虜収容所長松木直亮^{なおすけ}少佐によって検閲されたことを表す。また、右上の「横」は、横手村派出所の意味である。この俘虜が収容されていた長国寺は横手村にあり、この印は、本部のある物産館に対して、この寺院が他の5寺院とともに横手村派出所の監視下にあることを示している。また、このはがきは、「(大正) 4 (1915) 年 1月1日、(午) 前0-8 (時)」の間に熊本坪井局にて受け付けられ、1915年1月1日、つまり同日に門司の消印が押されている。なお、門司からヨーロッパへは、門司→大連→南満州鉄道→シベリア鉄道を經由して送られたと考えられる。次に左側の「文面」を見ると、次のような内容となっている。

26. Nov. 1914 1914年11月26日

Herzlichste Grüsse Erich 心からの挨拶を送ります。 エーリヒより

Abs. : Erich Fischer Untff. (=Unteroffizier) d. K. (=der Kompanie) 4. / III. S.B. (=Seebataillon)

差出人：エーリヒ・フィッシャー 第3海兵大隊第4中隊・下士官

Kriegsgefangener 戦争俘虜

Kumamoto Südjapan 熊本 南日本

それでは「裏面」を見てみよう。裏面には、キャプションによると「肥後相撲館」の写真が印刷され、その上に次のような一文が書き添えられている：

Gestern haben wir eine Chrysantemen-Ausstellung in diesem Zirkus besucht.

昨日このサーカス小屋で菊の展示会を見学した。

ここで「サーカス小屋」と称されている「肥後相撲館」という建物は、1913(大正2)年から1927(昭和2)年まで熊本市辛島町6番地に存在した施設で、相撲、サーカスなど様々な見世物興行の他、映画館としても用いられていた場所である。ところで、この菊(人形)の展示会見学が、実際1914年11月25日に実施されたことは、翌日の「九州日日新聞」の第3面に次のような記事として掲載されていることから確認できる。

「日本菊日本菊 相撲館の菊見物：熊本収容の俘虜は昨日、肥後相撲館の菊人形見物に出掛けたり。午前九時より下士以下百六十七名、午後二時より将校三十六名とが日本菊日本菊と大喜びに半日を消したり。……」

熊本のドイツ兵俘虜は、『熊本俘虜収容所記事』によると、午前6時の起床から午前9時の点呼、そして午後9時の就寝からなる日課に従うことが義務づけられていたが、それ以外は、収容所においてもかなりの行動の自由が認められていた。実際、上記の菊展示会の見学や水前寺など近郊への散歩が頻繁に行われていたことが郵便からもうかがえる。

4. 2. 熊本→ドイツ：No.13の資料



図5 俘虜郵便：熊本→ドイツ (No.13)

次の資料は、1915年4月6日付けのFritz Leibig（フリッツ・ライビヒ）のはがきで、ドイツの同僚宛てに送られたものである。「表面」にSee (=Service) DES PRISONNIERS DE GUERREや「独逸行」の朱印があることは上記4. 1. の資料と同じであるが、異なっているのは「熊本俘虜収容所検閲済」と紫印があり、「渡邊勉章」の印が押されていることである。これは歩兵大尉渡邊勉が検閲したことを示している。このはがきも、横手村派出所から坪井局へ「(大正) 4 (1915) 年4月8日、(午) 后2-4 (時)」に引き渡され、1915年4月9日門司の消印が押されている。宛名は Theo Scharlach (テオ・シャルラッハ)、住所はNiddagastrasse 14 I. Frankfurt a/M/Rödelheim Deutschland (ニッダガウ通り14 I. フランクフルト アム マイン、レーデルハイム、ドイツ) である。

Kumamoto, 6. IV. 15

Werter College

Besten Dank für ihre l. (=liebe) Karte vom 20. 2. 15., worüber ich mich sehr freute. Verzeihen Sie, wenn ich Ihnen nicht früher ein Lebenszeichen von mir gab, denn wir dürfen nur jede Woche einen Brief und eine Karte abgeben. Hier in Gefangenschaft erfahren wir nichts von dem Kriege zu Hause. Man muss sich eben meistens mit engl. (=englischen) Lügen begnügen. Hoffentlich ist der Krieg bald zu Ende. Ich grüsse Sie nebst Frau Gemahlin aus der Ferne. Beste Grüsse an die noch anwesenden bekannten Herren & Damen. Ihr Fritz Leibig.

「熊本にて、(19)15年4月6日。親愛なる仕事仲間よ。(19)15年2月20日付のお手紙を頂き大変ありがとうございます。私の消息をもっと早くお知らせできず申し訳ありません。というのも、週ごとに手紙1通、はがき1枚しか書くことが許されていないからです。当地の俘虜収容所では

故国の戦争について何も知ることができず、たいていはイギリス側の偽りの宣伝に甘んじねばなりません。じきに戦争が終わってくればよいのですが。遠き地より、あなたと奥様にご挨拶申しあげます。そして、そちらにおられる知り合いの紳士淑女の皆様方にくれぐれもよろしくお伝えください。 あなたのフリッツ・ライビヒ。」

ところで、この文面の中で注目されるのは、「週ごとに手紙1通、はがき1枚しか書くことが許されていないからです」という文言である。そもそも俘虜は何通の郵便を出すことが許されていたのであろうか。『熊本俘虜収容所記事』によると、熊本俘虜収容所では、毎週、「将校は書面2、端書2、準士官は書面1、端書1」との記載がある。電報はこの制限外である。Leibigは階級が不明だが、彼のはがきの文面内容は準士官の割り当て数と同じである。なお俘虜郵便は、俘虜宛てのものも含め、条約により無料であった。

さらに、熊本収容所では、同じく『熊本俘虜収容所記事』によると、封書・はがきの発信総数は、27,586通（国内6,087通+国外21,499通）で、1人当たりの平均数は42.4通（国内9.4通、国外33.0通）である。一方、受信総数は、21,931通（国内6,474通+国外15,457通）、1人当たりの平均数33.6通（国内9.7通、国外23.7通）である。これを開設期間の7ヶ月で割ると、毎週発信は1.5通、着信は1.2通となる。つまり、熊本の俘虜は、平均して、1週間に1通の郵便物を送り、かつ受け取ったことになる。また、俘虜郵便には当然のことながら検閲があり、没収信書として計37通の記録もある。ただし、没収の理由については述べられていない。

ちなみに、徳島板東収容所では、俘虜郵便は、毎月、「将校：封書2通、はがき3通、兵卒は各1通」との制限があった。ただし、瀬戸（2006）によると、実際には平均して俘虜1人あたり、1ヶ月に3通までの郵便を差し出すことが許されていたという。それでは、日本に収容されている俘虜全体ではどれくらいの郵便がやり取りされたのであろうか。瀬戸（2004）は、俘虜総数を4,600とし、仮に俘虜1名が月に2通のはがき・封書を出したとして、5年間の俘虜郵便の総数を $4,600(\text{名}) \times 2 \text{通} \times 12(\text{ヶ月}) \times 5(\text{年}) = 55 \text{万} 2,000 \text{通}$ 、と推定している。これには俘虜宛ての郵便は含まれないので、仮にその数を50万通とすると100万通の郵便物が収容所と外の世界の間を往復したと想像できよう。そして、残存数は、かりにそのなかの1%が残っているとして、その数は1万通ということになろうか。

4. 3. 熊本→ドイツ：No.11の資料

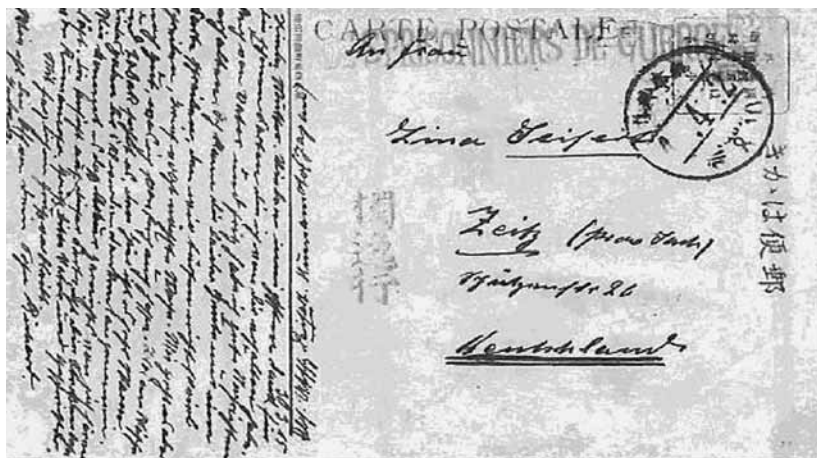


図6 俘虜郵便：熊本→ドイツ（No.11）

第3の資料は、Richard Seifert（リヒャルト・ザイフェルト）が母親宛てに書いた1915年3月30日付けの郵便はがきである。「(大正) 4 (1915) 年4月3日、(午) 后8-10 (時)」に熊本坪井局に持ち込まれ、1915年4月3日に門司に届いている。

宛名はLisa Seifert（リーザ・ザイフェルト）、住所はZeitz (Prov. Sach. (=Provinz Sachsen)) Schützenstr. 26 Deutschland（ツァイツ（ザクセン州）、シュッツェン通り26、ドイツ）である。（なお、解読不明箇所は、以下□□□とした。）

30. 3. 15. Liebste Mutter. Meinen innigsten Dank für die schönen Karten, die ich von Dir erhalten habe. Auch von Vater und Fritz habe ich gute Nachrichten erhalten. Ich kann Dir leider heute nur eine Karte schreiben, denn wir dürfen nicht so viele schreiben, Brief folgt nächste Woche. Mir geht es aber auch gut, was ich von Euch auch hoffe. An Pfeiffen und Tabak fehlt es, aber hier ist es sehr warm. Wie kommt es, daß Arthur gar nichts von sich hören läßt. von Kumamoto. Grüß bitte Vater und Geschwister. Mit herzlichem Grüß verbleibt dein Sohn Richard. Mir ist □□□.

Abs. Untffz. (=Unteroffizier) Seifert Kumamoto (Japan)

「(19)15年3月30日。親愛なるお母さん。おはがきを頂き心より感謝いたします。また、お父さんやフリッツからも元気な知らせをもらいました。残念ですが、今日はこのはがき1通しか書けません。たくさん書くことは許されていないからです。来週、続きの手紙を送ります。でも私は元気です。また、皆様もお元気でありますように。葉巻きやタバコが不足しています。当地は暑い日が続いています。アルトゥールから何の便りが無いのはどうしてでしょうか。熊本にて。お父さんや兄弟のみんなにもよろしくお伝えください。敬具。あなたの息子リヒャルト。□□□。

差出人：下士官 ザイフェルト 熊本（日本）。」

4. 4. 神戸→熊本：No20の資料

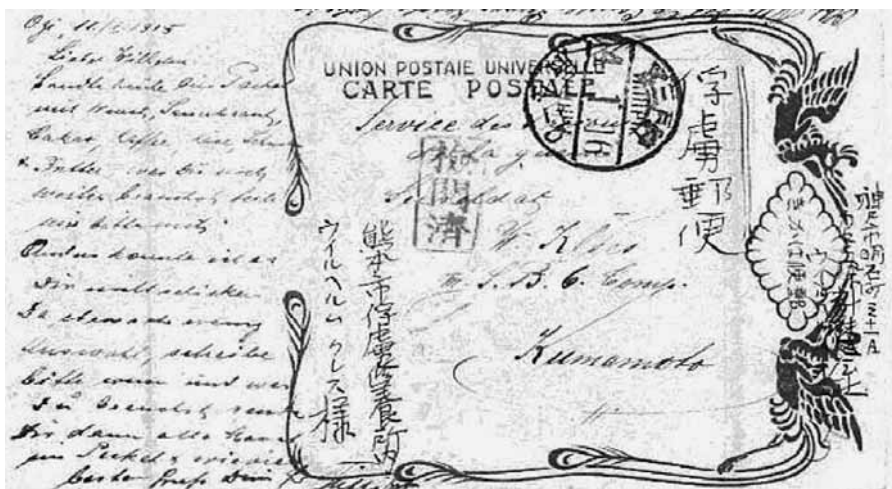


図7 俘虜郵便：神戸→熊本（No20）

上記の資料は、日本国内から収容所に送られてきたはがきである。差出人は神戸のWilhelm Ost（ヴィルヘルム・オスト）で、受け取り人はWilhelm Klees（ヴィルヘルム・クレース：第3海兵大隊第6中隊・補充予備兵）である。本文日付は1915年1月11日、神戸三宮1915年1月16日の消印が押されている。なおこの手紙には、「俘虜郵便」「神戸市明石町31A カセラ染料株式会社」「熊本俘虜修養所 ウィルヘルム・クレス様」と、どうやら日本人の手になると思われる縦書きの加筆が認められる。

Ogi, 11.I.1915

Lieber Wilhelm!

Sandte heute ein Paket mit Wurst, Sauerkraut, Kacao, Kaffee, Käse, Schinken und Butter, was du noch weiter brauchst, teile mir bitte mit. Anders konnte ich dir nicht schicken. Da □□□wenig Auswahl, schreibe bitte wann und was Du brauchst sende Dir dann alle auch ein Paket. unsere besten Grüße. Dein Wilhelm Ost. Abs.: Wilh. Ost c/o Cassel Senryo Keisha Kobe 31

「Ogi (?) にて1915年1月11日。親愛なるヴィルヘルム。本日、ソーセージ、ザウアークラウト、ココア、コーヒー、チーズ、ハム、バターを入れた小包を送りました。他に必要なものがあれば知らせてください。他のものは送ることができませんでした。□□□品数も不足しているので。いつ、何が必要か書き送ってください。いつでも小包をお送りします。敬具。あなたのヴィルヘルム・オスト。差出人：ヴィルヘルム・オスト。カセラ染料株式会社 神戸31。」

今回調査した郵便の中には、4. 3. と4. 4. のケースのように、食品や酒肴品を送ってほしいという依頼あるいは送ったことを知らせる内容のものが数点含まれていた。ドイツ兵俘虜には、規定に従って、ドイツ政府から（実務的には日本政府から）階級に応じて一定の給料が支払われていた。そのため、収容所内の「酒保」と呼ばれる販売所や出這入りの業者からタバコ、アルコールなども購入することもできた。それに加えて祖国からの仕送りや中国の上海やアメリカ各地、あるいは日本の神戸・横浜のドイツ人社会から義捐金や支援物資が届けられることもあり、俘虜たちは物資の点ではかなりゆとりのある生活を送ることができた。

4. 5. ドイツ→熊本：No.23の資料

今度は、ドイツから熊本収容所宛てに差し出された郵便を見てみよう。まず最初に取り上げるのは、ドイツのウルムから熊本の妙立寺に収容されている俘虜へ送られてきたはがきである。日付けは1915年4月4日。差出人は、ペピー・シャルク（Pepi Schalk）。PepiはJosefの愛称と察せられるので、本名はJosef (Joseph) Schalkか。真ん中に書かれている部分から、彼はPionier-Ersatz Bataillon 13 II. Depot, 4. Korporalschule, つまり「第13工兵補充大隊、第2需品部、第4下士官訓練学校」に所属していることがわかる。宛先はJosef Mosandl（ヨーゼフ・モーザンドル）、Obermaschinenmaat（海軍3等機関兵曹）である。ここで外国郵便の消印がすべて「敦賀」（福井県）となっているのは、ヨーロッパからの郵便がシベリア鉄道を通り、ウラジオストックを経由して敦賀まで運ばれたことによる。また、「俘虜郵便」を意味するアンダーラインのついたGefangenen-Sacheの手書きが見える。なお、熊本の到着印はない。以下に本文を引用する。

Lieber Josef! Sende Dir die herrlichsten Ostergrüße. Durch Albina erfahre ich zur Freude, daß es Dir gut geht. Wolle es Gott, daß die Stunde des Wiedersehens nicht mehr ferne ist. Mir geht es sehr gut u. (=und) bei uns im Batl. (=Battalion) ist man immer kreuzfidel. Gestern kam ich vom Urlaub zurück, den ich bei meiner Frau verlebte, denn seit dem 15. III. bin ich kriegsgetraut. Albina hat es Dir vielleicht geschrieben. Herzliche Grüße. Dein Dich liebend. Pepi Schalk

「親愛なるヨーゼフ! 復活祭おめでとう。アルビーナから元気なことを聞き、うれしく思います。再会の時がそう遠いことはありませんように。私も元気です。我が大隊仲間は陽気なものたちばかりです。昨日、休暇から帰ってきました。妻のもとに戻っていたのです。実は3月15日に戦時結婚しました。もしかしたらアルビーナが書き送っているかもしれませんが。敬具。あなたを愛するペピー・シャルクより。」



図8 俘虜郵便：ドイツ→熊本 (No.23)

4. 6. ドイツ→熊本：No.25の資料

最後のはがきは、受け取り人が、4. 5のはがきと同様、Josef Mosandl (ヨーゼフ・モーザンドル) であるが、差出人はそのはがきの中で触れられていたAlbina (アルビーナ) という名の女性である。消印はレーゲンスブルクのStadt am Hof (シュタット・アム・ホーフ)。本文の日付けは、1915年5月27日。敦賀の消印は1915年7月15日であるが、これは熊本のドイツ兵俘虜がすでに久留米に移動した後の時期にあたる。文面は次のように読める。なお、裏面は「レーゲンスブルク、シュタット・アム・ホーフ」(Regensburg, Stadt am Hof) の写真である。

27.5.15

M.I.I.J. (=Mein lieber lieber Josef) Jetzt naht wieder die Zeit, in der ich auf Nachricht von Dir hoffen darf. Samstag sind es acht Tage, daß ich deine beiden lb. (=lieben) Briefe erhalten habe. Maus, ich werde in meinen Ansprüchen vermessen. Ich wünschte mir wieder zwei od. gleich noch mehr. Viele viele innige Küsse von deiner Albina.

「(19)15年5月27日。いとしい いとしいヨーゼフ。今やあなたからのお便りを期待してよい時が近づいてまいりました。あなたからの2通のお手紙をいただいてから土曜日で1週間になりま

さて、熊本収容所では、収容期間中に俘虜4名が脱走を企て、有明海に面した松尾村沖の孤島（通称「盗人島」）で逮捕され禁固刑に処されるといった事件もあったが、今回の調査や先行研究を総合すると、俘虜にはドイツ政府から規定に従って給料が支払われ、国内外の縁故の者やシーメンスからパン・洋酒・葉巻・コーヒー等の食料品が送られたり寄贈されたりしたこと、また、水前寺公園や金峰山を始めとする周辺地域への遠出もしばしば許されるなど、かなりの自由が認められていた。また、将校の週間献立表を見ると、朝はパンと紅茶、昼食・夕食にはビーフ・ステーキ、ポーク・カツレツ、チキン・シチューなど十分な量の、しかもかなり豪華と思える食事が与えられていた。このような戦争俘虜に対する人道的な取り扱い、明治末期にやっとの思いで不平等条約撤廃を成し遂げ、日露戦争にも勝利して先進列強の仲間入りを果たそうとしていた日本が、国際法規（1907年のハーグ合意など）を遵守することで一人前の文明国であることを諸外国にアピールするという当時の国家的な狙いに合致するものであった。さらにまた、ドイツ兵俘虜には「生きて虜囚の辱めを受けず」といった思想は無縁であったため、総じて惨めさや後ろめたさの様子が見られることはなかったという。

ところで、ドイツ俘虜の日本での収容期間は足かけ6年近くに及び、その間戦傷や疾病（特にスペイン風邪）がもとで全国で86人が死亡している。一方、熊本で死亡したのはKarl Schilling（カール・シリリング）（?-1915）という名の1等水兵1名のみで、その亡骸は小峰官軍墓地（現在の市営小峰墓地）に埋葬された。その日の様子については、1915年4月17日付けの『九州日日新聞』が「俘虜水兵シルリングの葬儀——小峰墓地に埋葬す」との記事のなかで次のように伝えている。⁵

「熊本市細工町俘虜収容所の一等水兵カールシルリングの葬儀は十六日午前九時三十分熊本市手取本町天主公会教会堂にておこなわれたり収容所にては十五日午後三時上河原火葬場にて屍体を荼毘



図10 「日独友好の礎」（熊本市小峰墓地）

Karl Schillingの左隣は、熊本医学校ドイツ語教師
Eugen Ganter（1903（明治36）年死去）の墓碑銘

に付し遺骨は十六日早朝同教会堂に送られ松木収容所長渡邊大尉以下所員一同、師団よりは牧副官、衛戍病院よりは肥田病院長会葬し俘虜将校全部及細工町収容所よりは各寺院より十名宛の代表会葬し深堀宣教師聖堂に棺を迎へ入堂の式あり、[・・・]午前十時より棺は会葬者に囲まれて市外黒髪村小峰官軍墓地へと送られ埋棺の式あり、聖水、浄土は松木所長以下によりて投ぜられ花輪に掩はれし土饅頭に木の香高き十字架の墓標建てられたるが会葬者中青島（チンタオ）以来の朋友パウレルは俘虜将校より贈れる花輪を両手に確かと握りて放しも得せず朋友永遠の別れに涙を流して立去りかねたるは憐れを極めり。」

なおカール・シリリングの墓は、2008年に熊本日独協会の手により慰霊碑「日独友好の礎^{いしじ}」として整備され今日にいたっている。

* 本論文は、日本独文学会西日本支部第61回研究発表会（2009年12月5日、琉球大学法文学部）において

行った口頭発表「熊本ドイツ俘虜収容所における俘虜郵便について」の原稿に大幅加筆したものである。なお、ドイツ語手紙文解読にあたっては、熊本大学法学部准教授Eberhard Herzog氏から多くの助言をいただきました。ここに感謝申し上げます。

註

1. 瀬戸（2006）、p.72による。
2. 徳島板東俘虜収容所，および日本の俘虜収容所全般については、チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会のサイト Hie gut Deutschland alleweg! : <http://homepage3.nifty.com/akagaki/> が質量ともに大変充実している。本論文執筆においても、多くの貴重な情報を利用させていただいた。ここに厚く御礼申し上げる。
3. 俘虜郵便の研究は、ドイツのフィラテリストたちの資料収集と分析から始まった。その代表的な研究にはRoefler/Rungas、吉田景保（訳注）（1980）、Seitz（1998）などがある。また、日本人研究者による先駆的な研究には、瀬戸（2004）、瀬戸（2007）がある。
4. 俘虜の氏名、階級の確認については、註2.のサイト内の「（5）俘虜名簿」，「熊本収容所－俘虜名簿（俘虜番号順）」が大変役に立った。
5. 註2.のサイト内の「『九州日日新聞』に掲載された熊本俘虜収容所関係記事」による。

参 考 文 献

- 猪飼隆明（1990）：「熊本俘虜収容所記事」『市史研究くまもと（創刊号）』、pp.69-169、新熊本市史編集委員会。
- 窪田隆穂（2007）：「九州日日新聞に見るドイツ俘虜 熊本の7ヶ月」『Freund-schaft Brücke 熊本の日独交流』、pp.33-94、熊本日独協会。
- 熊本兵団戦史編集委員会（1965）：「熊本兵団戦史。満州事変以前編」熊本日新聞社。
- 瀬戸武彦（2004）：「俘虜郵便について」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究誌』第2号（2004）、pp. 41-48。
- （2006）：「青島から来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像」同学社。
- （2007）：「俘虜郵便について（2）」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究誌』第5号（2007）、pp.70-81。
- 鳴門市ドイツ館史料研究会（2003）：「どこにしようと、そこがどいつだ」改訂版。
- Roefler, Helmut /Rungas, Wolf, 吉田景保（訳注）（1980）：「<特装版>ドイツ俘虜の郵便1914-1920」駅通郵便会。（Roefler, Helmut/ Rungas, Wolf : Handbuch der Kriegsgefangenenpost Tsingtau 1914-1920（1964）の抄訳）
- Seitz, Ludwig（1998）：Die Post der Tsingtauer in japanischer Gefangenschaft. CB-Verlag Carl Boldt, Berlin.
- チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会 Hie gut Deutschland alleweg! : <http://homepage3.nifty.com/akagaki/>
- 掲載記事：
- 「熊本収容所——俘虜名簿（俘虜番号順）」
- 「俘虜収容所日誌 熊本俘虜収容所」（翻刻：堤諭吉）
- 「『九州日日新聞』に掲載された熊本俘虜収容所関係記事」